

神器・太極『寶』と楊貴妃渡来伝承

推理パート (1)



<其の一>

中国約1,300年前の唐朝の神器・太極「寶」が、何故現代の日本、そして富山県氷見市に辿りついたのか、歴史の空白です。

この問題は誰もが抱く疑問です。

「寶」解明時、膨大な検証に迫われ、思索がそこまで及びませんでした。

秘蔵していた故吉田翁の談によれば、「寶」は維新の廃藩置県時、富山藩から市の中に流れたとの事です。

そして富山の豪商が手に入れ、その豪商が戦後まもなく没落し、骨董市に売りだされ、翁が競り落としたと聞いておりました。

「寶」解明の初期段階に富山・金沢の図書館その他に足を運びましたが、探索は及びませんでした。

本年、富山藩主の菩提寺である真国寺のご住職を訪ね、諸々お聞きしましたが、未だ歴史の彼方であります。

拝命した承禎の名にかけて、1,300年前の唐朝の宗廟にあった「寶」が何故、富山藩まで辿りついたのか、歴史を大観し、挑戦する事に致しました。

<其の二>

「寶」解明時、インターネットがありませんでした。

近年のインターネットによると、①★山口県長門市に真言宗龍伏山ニ尊院と②★熊本県天草の新和町2か所に、安史の乱を逃れて、楊貴妃が渡来したと云う伝承がある事が分かりました。

そのほか③愛知県の熱田神宮④埼玉県奥秩父の法雲寺⑤京都泉涌寺などにも楊貴妃伝説が伝わるとの事です。

しかし、楊貴妃自身が『寶』を携え、渡来したとなれば、海路を考えると①★
②★の検証が最優先です。

①★の二尊院の創建の記録は 807 年、遣唐使・最澄の開山と伝えられる。



真言宗龍伏山二尊院



楊貴妃の墓

そこに楊貴妃が流れ着き、間もなく亡くなり楊貴妃の墓まであるとの事です。
インターネットによれば、中国の考古学者も調査に来て確かに楊貴妃が日本で
亡くなったと云う、証拠となるものまで存在していると発表しています。

二尊院の楊貴妃渡来は、H 2 2 年 1 2 月「女性セブン」H 2 4 年 1 0 月 NHK
総合「朝イチ」・2 0 1 5 年 1 月朝日新聞夕刊・同年中日新聞夕刊などにも取り
上げられたとの事です。

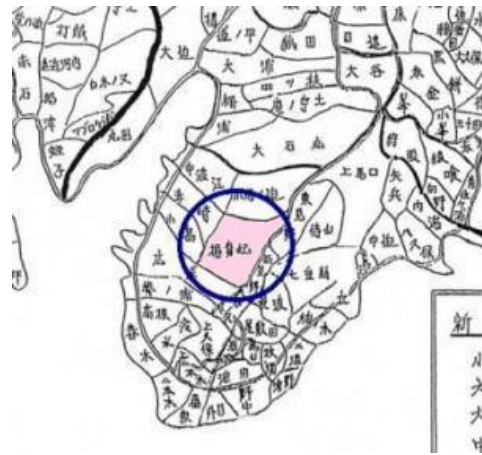
まさにテレビ、新聞・雑誌にまで取り上げられていたのです。



<上記写真は二尊院に伝わる楊貴妃渡来の古文書である>

<其の三>

また②★の熊本県天草の新和町には、古い地図に、「楊貴妃」と云う「字」地名があつて、ここにも古くから楊貴妃渡来伝承があるそうです。



熊本大学に留学していた中国人の考古学研究グループが楊貴妃渡来の研究小誌を刊行しております。

楊貴妃が最初②★天草に漂着し、島民に助けられ、生活していたが、数ヵ月後楊貴妃の渡来の報が大宰府の知るところとなり、天草を立て、再び天草灘から玄界灘を経て、①★二尊院の長門市・向津具（むかつく）半島の油谷に漂着した可能性も十分考えられます。

事実、「安史の乱」（755年～763年）は、758年渤海から帰国した小野田守により朝廷に報告され、反乱軍が周辺諸国に派兵される事態を想定し、大宰府に警戒の強化を命じています。

いずれ述べますが、安史の乱は、楊貴妃に思いを寄せた玄宗皇帝と賊軍の安禄山そして高力士の歴史ドラマです。

安禄山が楊貴妃の生存を知って、奪回に来る恐れも十分に考えられたのです。

2017年・5月に①★長門市の二尊院、10月に②★天草市新和町の二か所に電車を乗り継ぎ、レンタカーで現地に行つて参りました。

そして、楊貴妃渡来の双方の海岸に立ち「寶」の確信は大きく膨らみました。あらためて「寶」の原点に帰つて千里の彼方を凝視し、「寶」の旅路を辿る事としました。

それでは約1300年前の中国から、「寶」を携え楊貴妃が日本に辿りつき、どうして富山藩まで「寶」が流れ着いたのか、沈黙の歴史に挑戦です。

歴史の重要ポイントは、以下である。

- ①「寶」は洛陽「玄元皇帝廟」から長安の玄宗皇帝の元へ届けられたか。
- ②楊貴妃が馬嵬から逃れ、「寶」を携え日本に渡来できたか。
- ③「寶」が、前田藩にどの様にして渡ったか。

<其の四>

それでは安祿山に謀反を起こされ、楊貴妃が玄宗皇帝と長安から一緒に蜀へ逃げる途中、駅舎の馬嵬で絞殺されたと云うのは史実なのか。

①★二尊院も②★天草新和町2か所とも共通は、楊貴妃が駅舎で殺されずに窮地を脱し、日本に辿りついたと云う伝承です。

楊貴妃の逃避行・日本渡来説は、当時の中国でも、今日の中国の学者の中にも

根強く^{くすぶ}燃っていると云う。

それは、「新唐書」「資治通鑑」「長恨歌」いずれの史書も、殺害現場の馬嵬で宦官高力士が近衛隊長・陳玄礼に身柄を渡さなかった事で一致していると云う。

玄宗皇帝が楊貴妃の遺体を見ていない事も一致していると云う。

高力士の計らいで楊貴妃が欠損した「寶」を、逃亡の守り神と、身分証明品として



遺骸無き楊貴妃墓 陝西省馬嵬

携えて日本に渡来した可能性が、現実味を^お感じてきました。

★①★②どちらも現代中国の歴史研究員が、来日して、渡来の研究成果を、発表しております。

それでは、①②の研究成果を踏まえ、時計の針を1300年戻し、歴史に挑戦です。

<其の五>

歴史の重要ポイント、●①「寶」は洛陽「玄元皇帝廟」から長安の玄宗の元へ届けられたか。

それでは歴史の発火点、舞台を唐代、安史の乱に移します。

玄宗皇帝が長安を放棄し蜀へ逃げる時、洛陽の玄元皇帝廟から『寶』が玄宗の元に届けられ、難を逃れた可能性を推考する。

「寶」安置の「玄元皇帝宮」は杜甫の詠う一節のように、24時間厳重な警護で守られた唐朝の宗廟です。

神官や特別警護隊も配備された皇城と同格・いや、それ以上の大唐の宗廟です。安祿山謀反の一報と戦局は、刻々長安・洛陽、相互に早馬で伝令された筈です。賊軍安祿山の拠点の北京周辺で、『寶』安置の洛陽まで約700kmです。怒涛の進軍であったと伝えられる約20万の賊軍は、最速でも洛陽に迫るまでは15～20日はかかる筈です。

洛陽と長安、約 350 キロで、早馬で駅舎を乗り継ぎすれば、2 日ないし 3 日で反乱の報はもたらされた筈です。

安祿山が挙兵する頃、既に楊国忠に謀反を疑われていたのです。

ですから反乱の報は、放たれた間者から、刻々長安・洛陽にもたらされていた筈です。

神器・太極「寶」は、延人員何千万人を投入し、30 年を費やし完成なった唐朝の宝器です。

神器は天下の覇者、象徴の宝器です。

それを、放棄して玄宗が落ち延びる事は絶対に有り得ません。

手のひらに載るほどの神器「寶」です。

賊軍反乱の第一報は、玄元皇帝宮の神官・警護隊に届けられた筈です。

「寶」は大混乱の洛陽から、早馬を乗り継いで玄宗皇帝の手元に確実に届けられた、と考えるのが**正解**です。

「寶」は間一髪、難を逃れたのです。

太平に慣れた皇軍と、実戦を積んだ賊軍と、その結果は明らかでした。

長安の生命線、北の関所、潼関は破られ、かくて玄宗と楊貴妃は「寶」を抱え、

大混乱の長安を捨て、蜀に向かって蒙塵^{もうじん}です。

杜甫が戦乱のあと、神器「寶」が奪われた事を悲嘆して歌を詠んでいます。

しかし、安祿山の賊軍が神器「寶」を奪ったのか、玄宗が先に懐に入れて逃げたのかは、杜甫には知る術ありません。

杜甫は、「従弟亜の河西の判官に赴く送る」の一節で「寶」が安置された玄元皇帝宮に、賊軍が侵入し徹底的に破壊し火を放ち、既に廃墟になった情景を詠んだのであります。

神器・太極「寶」が完成なった天寶元年は、帝国挙げての大祝典を挙行しています。

ですから天下の覇者がもつ神器である事は安祿山も十分すぎる程知っていました。

「安史の乱」は天下の覇者象徴の、神器・太極「寶」の争奪戦でありました。

神器「寶」を手に入れば、全軍の志気は高まり、形勢は一挙に加速する。

当然安祿山は一直線に洛陽の玄元皇帝廟を目指した筈です。

しかし「寶」を守護する神官や警護隊により、既に「寶」は難を避け玄宗の手元に届けられていたのであります。

<其の六>

今一度、賊軍安祿山が発行した銅銭①「得一元寶」②「順天元寶」の意味を考

えます。

① は天下の覇者が持つ“唯一の「寶」を得た”事を、天下に宣言する錢文です。

② は「寶」を得た、よって、戦乱は終息に向かった、“天下は順天”と宣言する錢文です。

今日この二つの銅錢はインターネット・オークションに出品され、私の手元にあります。



銅錢



安史の乱

テレビ・ラジオの無い時代の謀略・情報操作であります。

「寶」の①②の銅錢は現在の北京周辺で、今日でも時々大量に出土するそうです。

北京周辺は安祿山の拠点でありました。

戦端を開く前に、勝利した時の準備に戦略貨幣をあらかじめ大量に鑄造していたのです。

安祿山の側近に唐朝の政治に通じた知者がいた事をビデオ映画「楊貴妃伝」は教えてくれます。

余談だが愚生は「寶」関係書籍以外、中国歴史ビデオだけでも過去10年、則天武后・楊貴妃シリーズ他、確実に550本以上は見てきました。

いずれにしても、この天下の覇者象徴の「寶」の貨幣を、挙兵前に用意した事自体、安史の乱は、神器「寶」の争奪戦であった事は明白です。

その史実に着目して著した歴史書を愚生は一冊も目にしておりません。

神器「寶」の存在を知らなかった事を差し引いても、お粗末であります。

<其の七>

玄宗と楊貴妃が逃避行したとき、楊貴妃の姉とその一族、そして宮中の女官も一緒につき従い、近衛兵も含め、総勢は約2,000人と歴史は語っております。

その時、玄宗は71歳、楊貴妃は38歳で、年の差は33歳でした。

歴史は高力士が絹の布で絞殺したと伝わります。

高力士は玄宗に何十年仕えた忠犬です。

玄宗の心中を読む能力は尋常ではない。

玄宗の目・表情・七癖で心を読まなくては勤まりません。
馬嵬まで、付き従った近衛兵が奸臣・楊国忠とその一族、楊貴妃の二人の姉とその子息全員を惨殺したのです。
暴徒と化した随兵は、さらに傾国の元凶と目する楊貴妃の殺害を隊長の陳玄礼に迫りました。
その随兵の怒りを制しきれず、陳玄礼は高力士を通じ玄宗へ楊貴妃の処断を迫る。
切迫した状況に玄宗は、断腸の思いで観念する。
そして、玄宗は高力士に、楊貴妃の死を了解する。
そして四面逃げ場のない身を悟った楊貴妃は、仏に今一度手を合わせる為の時間の許しを乞うたと歴史は語る。
絞殺場所は別棟の御堂で、立ち会いは高力士と女官だけと伝わる。
楊貴妃と女官の入れ替えも十分ありうる。
検死の立ち会いは高力士と警護隊長の陳玄礼だけである。
確認は二人だけで部下たちへの報告は隊長の陳玄礼だけで十分である。
陳玄礼は、玄宗即位前からの忠臣である。
玄宗に40年近く仕えて来た愚直な武人の陳玄礼は、玄宗の胸の内は、高力士同様、十分すぎる程分かっている。
●進言は陳玄礼の本意ではない、しかし楊一族を惨殺し、暴発寸前の部下達の怒りを収めねばならない。
陳玄礼は高力士の過去の用意周到さを十分知っている。
阿吽（あうん）・切迫の状況で高力士と陳玄礼の暗黙の密約は瞬時に成った。
随兵等には楊貴妃絞殺の報告は、貴妃の遺衣を高く翳（かざ）し、陳玄礼の“一喝”で事足りる。
かくて楊貴妃は高力士の最側近に守られ、本隊の去った馬嵬を脱した。
インターネットの楊貴妃伝によると、楊貴妃が窮地を脱した可能性を幾つか述べている。
①処刑は外傷の無い絞殺の手法を取った事。
②高力士は、玄宗皇帝は勿論であるが、楊貴妃にも特別な感情を持っていたと記しています。
③絞殺の現場は高力士以外誰も見ていない事。
歴史に付け加えるなら、唐朝の神器・太極『寶』が、現実に手元にあるのであるから、愚生の推論も俄然、現実味を^お佩びてくる。

＜其の八＞

時計の針を戻すと、洛陽から馬蒐に向かう馬車の中で玄宗は自責の念で苦悶する

「寶」は 30 年を費やした唐朝の神器で有る。

大中華の国家財政をつぎ込んだ、承天の大寶である。

この神器「寶」には、大唐安泰の完璧の呪文が秘められてあった。

「寶」の印面四辺の和は広大無辺、侵すべからずの大唐の国土、永遠の「九」數位を秘めた寸法である。

東西には日月・北は北極星・南には南極星を配当し、東西南北を中華の軍神と崇める「孫子」に永遠に警護させる布告と祈禱もした。

そして太極・完璧・神の九文字を鎮護するのは有徳の帝王の御世に現れる、神獣・獅子「白澤」である。有徳の帝王は己自身であった筈。

焼成の 27 年間、昼夜を問わず道士達を交代させ護摩を焚かせ大唐の安泰と神器の完成の読経をしたのである。

そして、唐代一の幻の篆刻師が、3 年を費やし印面の神の文言「九文字」を天に祈り、まさに天刻したのである。

重ねて印面は大唐の国土、その寸法は、永遠の九數位の九寸である。

しかし今、大唐の国土は侵犯され、長安から蜀に向かって蒙塵している。

後続の伝令によれば、賊軍は宗廟、洛陽の玄元皇帝宮に火を放った。

易占革命・神器「寶」の神通力は失われた。

「寶」＝皇帝、それはまさしく玄宗自身である。

悲痛まさに自責の念、玄宗は烈火の如く「寶」を馬車の外の地面に叩き投げた。

その時、傍らの楊貴妃が咄嗟に玄宗に身を寄せた。

それが投げつける力を削ぎ衝撃を和らげた。

欠損した「寶」を抱き拾ったのは、高力士であった。

「寶」を救ったのは地球上に一点も無い超高密度な「寶」自身と楊貴妃であった。

「寶」印台底部の欠損と獅子の足部の^{ひび}輝割れは玄宗の激怒の衝撃痕である。



高力士も楊貴妃も、30年間延人員何千万人動員された、唐朝の国家事業であった事を知っている。

そして焼成に携わった陶工達の祈りを知っている。

しかし「寶」に対する玄宗の夢は消え、最早「寶」に未練は無かった。

「寶」への怒りは己自身への怒りであった。

安祿山が謀反を起こす前、楊国忠はじめ重臣の諫言を聞き入れなかった。

全ては「寶」に対する己の盲信と不明であった。

放心の中に深い悔恨があった。

楊国忠の一族郎党は、己の近衛兵に全て惨殺された。

それでも飽き足らず、近衛兵が楊貴妃の死を要求する。

いかに楊一族への恨みは凄かったか、玄宗は初めて己の不明を悟った。

しかし玄宗は片時も離れず身を案じる楊貴妃だけは救いたい。

楊貴妃に何の落ち度も無い事は玄宗が一番知っている。

楊一族を取りたてたのは、全て皇帝である自分自身で有る。

楊貴妃には自分しか頼るべき術がない身である。

たった一人の愛する貴妃の命すら守れないで、何の皇帝であろうか。

健気に自分に尽くす貴妃の命だけは、何としても助けたい。

皇帝とて、一人の人間である。

助けたい、その一念は高力士には分かりすぎる程分かる。

玄宗とて、今のおかれた状況は絶体絶命である

玄宗の皇帝としての最後の意地であった。

その玄宗の心底は、無言の高力士も察知している。

深謀遠慮、用意周到・知略に富む高力士で有る。

緊迫の中にも、あらゆる状況を想定している。

＜其の九＞

「寶」解明時、印台の欠損と獅子の両足の輝を見て、この大唐の神器が何故欠けているのか、膨大な資料に埋もれて思索が及ばなかった。

もし安禄山が取得していたなら、勝利の祝典で天下に示し、粉碎である。

洛陽・長安二京を占拠したとはいえ、戦況はまだ混沌である。

「寶」を粉碎するなら、名実ともに皇帝即位の大祝典の面前で有る。

しかし「寶」は難を逃れた。

玄宗皇帝宮の神官や警護隊は身に代えても守る。

万一「寶」の取り扱いに粗相があって欠損や紛失したなら、咎めは五族・九族に及ぶ。

間違いなく、「寶」は駅舎を乗り継いで、早馬で玄宗のいる長安に送り届けられたとみるのが、**正解**である。

それが観えぬなら史家失格である。

余談であるが、もし楊貴妃が身を寄せず玄宗の力が強く、獅子印の首か胴体が取れていたなら、拙者の33年間の人生は、全く違ったであろう。

また、神器「寶」の歴史の史実も、そして楊貴妃渡来の史実も全て、永遠の闇、蜃気楼である。

拙者にとって幸か不幸かはわからないが、全て天の悪戯^{いたずら}としか言いようがない

この小誌を書かせたのも、楊貴妃の願いであろうか。

天命宿命を感じずにはおれない。

＜其の十＞

ここで、「寶」の流転に関わる、高力士・安禄山の心の暗部に触れて見たい。

歴史は様々な人間の心が綾なすものである。

故宮・美女3,000人、その宮女の中に、群を抜いた百花の妖精、牡丹の花が楊貴妃であった。

歌舞音曲に優れ、無欲で天真爛漫、愛らしく気品に溢れ、天女さながらであったと、歴史は詠う。

安史の乱の頭目は安禄山である。

その安禄山も絶世の美女楊貴妃に、思慕を寄せていた事を、唐代誌が「フォーカス」している。

安史の乱の時、楊貴妃は38歳の女盛り。

楊貴妃の養子になって、後宮に出入りを許された安禄山と楊貴妃がただならぬ関係であったと、当時の『文春』は記す。

玄宗と楊貴妃の年の差は 33 歳、玄宗は 71 歳である。
奇しくも本年、玄宗と同一年、71 歳である。
玄宗の心境、十分理解できる。
玄宗に劣らぬ陰陽の樂園を夢のなかで遊んだ。
地球の人口の半分は女性である。
陰陽を知らずして歴史は語れない。
それは机上の学問である。
安史の乱は、安祿山の楊貴妃への熱い思いが**発火**の原因の一つでもあったと歴史は語る。

<其の十一>

高力士もまたしかりである。
楊貴妃を市井から最初に見出したのは高力士であった。
高力士は宦官である。
宦官は、欲望を断ちきられた無色透明な、中性生物である。
それだけに、相手の心の裏側を読む、人間洞察は常人では無い。
彼は歴史・文化・芸術そして詩歌に精通した、教養人でもあった。
また玄宗の詔勅の多くを書いたのも高力士で、優れた戦略家でもあった。
大唐を築いた玄宗皇帝の影となる、その危機予知能力も、尋常ではない。
心の洞察なくして歴史は語れない。
高力士には妻も妾も持ち、情欲はゼロでは無い。
高力士もまた妖精・楊貴妃に密かな思慕を寄せていたと歴史は語る。
牡丹の花を愛でた高力士の目には、百花の女王が、まさしく楊貴妃であった。
馬嵬までの随兵の不穏な動きを察知し、その先のあらゆる事態を想定している。
ここに至って、玄宗と楊貴妃を切り離す策も、脳裏に描いている。
手元の欠損した「寶」は、楊貴妃の旅路の守り神であり、流転の先の貴妃の身分証明品でもある。

<其の十二>

歴史の重要ポイント

●②楊貴妃が馬嵬から逃れ、「寶」を携え日本に渡来できたか。
熊本の天草に「字」名に「楊貴妃」と云う地名が存在し、そこに上陸した伝承と、山口県長門市の海岸に漂着し、あえなく亡くなり、祀ったと云う、二か所に楊貴妃渡来**伝承**がある。
「伝承」は「伝説」ではない、「説」は仮説や説話の類で蜃気楼である。
「伝承」は、文字にできなかった数百年、名もなき人々により語り継がれた、

“言葉の記録”である。

天草渡来伝承の著書「新楊貴妃伝」によると、楊貴妃は揚子江を下りそして揚州で、渡航の準備が整うまで一時、身を潜めたという。

そして、翌年の7月初め頃、高力士が手配した軍船で日本に向かったという。勿論通訳も乗り込んだと云う。

現代はインターネット時代である。

インターネットの解説によると、楊貴妃が日本に漂着し得たか、現代の海洋科学を駆使して、その可能性を検証している。

今一度インターネットを要約して観る。

①「新唐書」「資治通鑑」「長恨歌」いずれの史書も、高力士が近衛隊長・陳玄礼に身柄を渡さなかった事で一致していると云う。

②玄宗皇帝が楊貴妃の遺体を見ていない事も一致していると云う。

そして高力士の最後の秘策として陳玄礼に密かに国外に逃がしのではと云う。

駅舎馬蒐から長江そして天草の海路を説明している。

慎重を期して、逃避経路は近距離の黄河ではなく、馬蒐から陸路 80 キロの長江である。

そこまで行けば短時間で東シナ海沿岸まで移動出来た。

当時の唐を取り囲む、国際情勢は複雑で国境付近のウイグル・吐蕃・契丹が勢力を強めていて、その方面では殺されるのは必至であったという。

また新羅が唐軍を駆逐していて朝鮮半島を統一しつつあって、半島方面に逃すことも危険であったと云う。

高力士の国際感覚、嗅覚は鋭い。

長江、河口の遙か先は、蓬萊・日本で有る。

<其の十三>

天草渡来のインターネットによると、中国沿岸から、日本に漂着する気象庁の海流データーを載せて、その可能性を記している。

以下は中国から天草・長門に向かう対馬・黒潮の海流図です。

近年、天草地方の漂着物のペットボトルを調べると 23%が中国製であると云う。

中国沿海州から比較的遅い帆船でも、5 日程で日本に到着出来ると云う。

渡来が天草・長門ならば、対馬・黒潮と偏西風の追い風で有る。

黒潮・対馬海流、どちらでも順風なら 5 日～7 日で天草・長門に辿り着く。

当時も今日も、中国でも楊貴妃が日本に亡命したという説が根強く^{くすぶ} 燻る。



神器「寶」が日本にある現実が、その説を確実に浮上させる。

★「字」地名の天草か、★長門市の二尊院か、思索は大きく膨らむ。はじめ天草に上陸し、一定期間の後、天草から岸沿いを伝って天草灘・壱岐水道・玄界灘を大きく迂回して長門市に漂着した事も十分ありうる。

<其の十四>

あらためて、天草の「新楊貴妃伝」の小誌を紹介する。

小誌は、地元の楊貴妃伝説に詳しい平田豊氏の説明によれば、熊本大学の田中知啓先生を中心に中国人の考古学研究の留学生グループも協力して書きあげたとの事である。

現代中国の学生達も、解明「寶」本に驚愕した王敏女史（現・法政大学）同様、楊貴妃渡来説が決して荒唐無稽とは思っていない証左である。

それによると、高力士と陳玄礼の策で、馬嵬から逃れた楊貴妃は、いったん揚州で身を隠していたと云う。

そして、翌年7月高力士の手配で、軍船で天草に上陸したとの事である。

<其の十五>

それでは楊貴妃が携えてきた「寶」が加賀藩に伝来したのかを考証する前に、

①何故「寶」が焼成不可能で、②何故30年を費やし延人員何千万人を要したのか、その理由を説明しておかねば、読者に更なる歴史に引率できません。

ここは足踏みして少し焼き物の予備知識が必要です。

①まず伊万里焼や九谷焼の高さ2m近い大壺でも、高台、胴回り、口回りの厚さ35mm以上ある焼き物は愚生の知る限り殆んどありません。

反対に、現代においては卵の殻程薄い、お碗の反対側が透けて見える程の焼き物も焼成可能です。

「寶」は、印台高さ4辺、底部と上面8辺1mmの誤差はありません。

そして印台に空洞が無い、史上空前の厚さ、47mmです。

このような、自然火力で焼き上げた焼き物は不可能で、日本東洋陶磁学会の竹内順一名誉顧問の見解通り、地球上に一点も無い筈です。

通常、焼き物は、原料となる陶石を粉状にし、水を加え捏ねて、胎土を作り、

壺とか望みの品を造形します。

「寶」は超高密度の白磁で、胎土となる粉末は、超微粒子・パウダー状の不純物ゼロ状態の陶土が絶対条件です。

当時は陶石を水車また牛馬で石臼を引かせ、そして幾段もの沈殿槽で集荷された超微粒子と想像されます。

インターネットその他の資料によると、焼き物は一定期間、天日に晒し、極力乾燥させ、次に600℃～800℃の低火度で素焼きし、水分を飛ばした後、最終約1300℃前後の高熱で本焼きします。

通常、磁器の場合、1割5分前後、収縮するそうです。

素焼き本焼き、どちらも、タテ・ヨコ、高さ、ナナメ、全方位で収縮が発生します。

球形は中心点より熱放射率・収縮率が一定であるが、立方体の印台は不均等で、より困難と想像されます。

素焼きの段階で造形物に水分や空気が残った場合、空気や水は熱で膨張するので、爆発や、万化の捩れが生じ、意図した形状が成形できません。

昔の蒸気機関車を想像してください。

熱せられた蒸気の膨張が、何十輦・何百トンの貨車を牽引するのです。

その水と空気の驚異的膨張の暴発力と、熱による収縮、“真逆の力”が、1300℃の窯の炎の中で激突するのです。

印台内部の、零コンマ0、000000001mm立方の残留水分も空気も不純物もアウトです。

「寶」は宇宙創成、太極のビックバーン、質量無限大のマグマです。

本誌5頁の「陶工集団と神への祈りと挑戦」の図の通り、厚さが35mm以上1mm増すごとに、臨界点を突破、まさに神の領域に突入です。

本誌10ページ、2016年8月、富山県中央研究所で断行したCTスキャンの断面写真を見ると、印台内部のマグマの痕跡に沈黙です。

日本を代表する幾人もの陶磁器研究者が焼成不可能と断言しております。

玄宗皇帝が「寶」焼成を勅令した712年、中国全土の陶工を一ヶ所に招集しております。

焼き物は、木火土金水、五行思想の五材で制作されます。

神器「寶」は、天の理に合わなければ焼成は叶いません。

神器の窯は、巨大な人工丘陵の東西南北、斜面四方に構築された大型の連房式登窯（龍窯）と想像します。

通常、本焼きは約60時間、3日をかけて徐々に火力を1300℃に上げて、同じ3日をかけて自然冷却するとの事です。

一方の龍窯が冷却し、検分された後、次の龍窯に点火です。

初期段階は一度の素焼きで獅子印「寶」は千単位なのか。
しかし結果は茫然自失、目も当てられない惨状で、言葉を失ったであろう
その為次々と、数量は右肩上がり、もはや数量の戦いであろう。
日本でも1回に茶碗類を3万個焼き上げる登り窯があったと云う
陶工集団の経験則である、1回に6日+9日=15日とすると年24回の火入れ、
 $24 \times 27 \text{年} \times 5000 \text{体} = 324 \text{万} \text{体}$ である。
これでも最低ラインの数字である。
まさに、想像を絶する数量です。
龍窯の更なる改良と大型化、まさに筆舌に尽くせぬ挑戦であったろう。
焼成までの27年間、何十人の道教導師が昼夜を問わず、護摩を焚いて火神の
降臨を誦経する。
勿論、神器「寶」制作、戦略統合本部の指令下、陶工集団は、全て分業、流れ
作業で組織化されている。
陶工集団、導師達の、果てしなき戦いです。
「寶」の印台は皇帝の天下、「寶」は神器で、1ミリの誤差・1ミリの歪みも許
されません。
しかも印台と獅子は一体で焼かれ、収縮率は当然違います。
昔から自然火力の焼き物は“火まかせ”と云われます。
まさに熱管理と制御は、火神まかせです。
「寶」は、その何百万個、千万個単位の焼成の果ての、一体です。
専門資料によると白磁の母体は青磁で、素地から鉄分を除去し、ケイ酸とアル
ミニウムを主成分とする素地で1300℃の還元炎で焼き上げるとの事です。
「寶」焼成は唐代の最先端科学、叡智の結晶である。
神器「寶」は一般の焼き物の遥か天上、神の領域であります。
<其の十六>
それでは次に、②の延人員何千万人を動員しなければならなかった、神器「寶」
制作の壮大な問題に移ります。
それは神器「寶」制作の窯場の絶対条件であります。
通常窯場は陶石の採れる場所の周辺です。
しかし「寶」は神器で、陶石の採れる場所は一切無視です。
神器誕生の窯場は天の道理に叶う場所でなくてはなりません。
印面、九文字の東西は日月で、北は、天帝が住む北極星で、南が空席です。
南は南斗六星が輝く南極星の地です。
洛陽から真南、約100キロ、南極星が輝く「龍興」の地です。
「龍興」は龍=皇帝で、「興」は、まさに神器、興る、です。
「大漢和辞典」漢字の最大64画の2文字の「龍」と「興」に「唐置く、河南

省・豊・寶鼎の東「龍興」とあります。

ここは世界の陶磁器研究者が未だ謎とする愚生が断言する唐白磁の窯場です。

叶わぬ願いであるが渡航してボウリングしてみたい神器「寶」誕生の聖地です。

想像を絶する陶片の残骸が厚い地層となって現れるであろう。

千里眼承禎である、間違いなく歴史が証明するであろう。

この唐朝が決定した窯場「龍興」選定の天の道理は「寶」本に詳しく書いてあります。

いずれにしても、焼成の27年間、「龍興」の地に陶土と焼成燃料を搬送しなければなりません。

万里の長城に使用されたレンガを焼く、燃料はたいした量ではありません。

力を注いだ始皇帝の秦王朝は、あっけなく15年で滅び、長城建設は、その間の10年、約100万の動員と云われます。

神器「寶」は中国4000年文化の黄金期、大唐の金字塔です。

神器「寶」から比べたら長城や8000体の兵馬俑などさして驚くに当たらない。

兵馬俑など、神器「寶」の奇跡の磁器に比べたら、低火度の初歩的素焼きで、素人目には壮大感があって驚くだろうが、拙者には驚くに値しない。

大唐は他民族とも良好な関係でシルクロードも安全通行、玄宗は、長城建設に国力を殆ど注がなかったとある。

大唐の“至上命令”は神器「寶」焼成であります。

当時の焼成燃料は樹木で、恐らく周辺の山々を伐採し尽くしたであろう。

通常登窯では、高火力の出る燃料は赤松の木で、当時も高火度の松の木が主力と思われる。

河北省・定窯、湖南省の荊州窯・龍興に近い汝州窯周辺には、豊富な産炭地があり、焼成燃料に石炭を使用したとあるが、時代が下がった晩唐から宋代である。

何百キロ先の山西省・陝西省にまたがる、広大無辺な黄土高原が禿山なのは、神器「寶」が原因と想像するは、荒唐無稽か、・・・距離を考えても、それでも拙者は未だ**“完全否定”が出来ないのである。**

いずれにしても、陶土は、晩唐から白磁や青磁の名品を続々生み出した河北省の荊州窯か定窯の地域から搬送されたと考えるのが順当であろう。

「寶」が焼成なった後、何万人の陶工達は、荊州窯や定窯の地、そして故郷に散って、晩唐から宋代の隆盛をもたらしたのである。

湖南省の荊州から河南省の龍興まで、約300キロです。

陶土と、高火度の樹木の搬送に27年間、延々と続く荷駄の列が目に迫ります。

<其の十七>

インターネットによると現在河南省・宝豊県は臨汝県・平頂山市に組み込まれているようである。

そしてこの地の清涼寺にある官窯遺跡が有名とある。

もしかして、この清涼寺周辺が「寶」の龍窯の可能性も考えられる

周辺は耕作地が広がり、近くには、良質な産炭地もあるらしい。

そして時代を下った宋代に、この地の汝州市で汝窯が勃興したと云う

2017年、台湾故宮博物院の汝窯で焼かれ、徽宗帝も愛用した青磁水仙盆「天青色」が、大阪市立「東洋陶磁美術館」で展示され鑑賞してきた。

この汝窯で焼かれたのは約20年間だけで、廃窯となったとの事である。



<平頂山市宝豊県・白雀寺>

<河南省>

その汝窯の窯址は明確にはまだ確認されてはいないとある。

焼成の龍窯の地は即、神器誕生の聖地である。

人工の山と登り窯は完全に取り除かり、そこには、道教神を祀る神殿が建った筈である。

であるから、窯址が発見できないのも当然であろう。

兵火の址の官用遺跡の清涼寺か、再建と思われる上記写真の白雀寺周辺か。

興味は尽きない。

インターネット（航空写真）で平頂山市周辺の地図を拡大してみると、日本の河川や湖と違い、もの凄く蛇行していて現代でも堰堤などの治水工事が整備されていないのがよく分かる。

1300年間の度重なる洪水で、窯址は相当な土砂の堆積が想像される。

愚生のモットーは行動・体験・実践主義である。

しかし、陶芸と中国への旅行だけは残念としか言いようがない。
その為、中国旅行はビデオの中国世界遺産シリーズ・雑誌・インターネット等々
で我慢している。
余談だが愚生は歴史を観る時、地図と自前の年表、それに現地に足を運ぶ、加
えて人間洞察が必要と考えている。
しかし時間と現実面で及ばず、その点だけは各位に御了承願いたい。
河南省は戦国期より治乱興亡の中原の地である。
これ以上は、歴史を待つしか術は無い。
確かな事は、神器・太極「寶」の事業は、人類史最大の国家事業であった。

<其の十八>

それでは陶磁器をクリアし、唐代から海を越えて時代を一気にタイムスリップ
して●③の重要ポイント「寶」が加賀藩にどうして伝来したのかに移ります。
楊貴妃渡来から、信長の戦国期まで、「寶」は約800年の歴史の深い眠りに就
いていた。

確かな事は、日本中の学者が誰一人として異論反論出来ない唐朝の神器・太極
「寶」が今日の日本、越中富山・獅子の郷に存在する現実である。

それでは、時代を一気に下って、加賀藩前田利家について踏み込もう。

藩主前田利家は織田信長の配下であった。

信長は当時、茶道具その他、あらゆる美術品の日本一のコレクターであった。

当時、ルソン壺1個が、一国一城の値と云われた。

そのブームに先鞭をつけたのが信長である。

茶会は死中の一服の静寂である。また戦国武将の情報交換のサロンでもある。

足利文化の茶の湯の茶器に、一国の値踏みをしたのが信長である。

信長最後の茶会、本能寺の変で、多くの名碗が炎の中に消えたと伝わる。

正倉院の香木蘭奢待（らんじゃたい）や松永弾正の平蜘蛛の逸話は、信長の鬼
才を物語る。

また当時の3代将軍足利義満・8代将軍義政が継承した中国の鑑蔵印も最後は
信長が殆ど手に入れたとある。

義満は中国宋の風流天子・徽宗帝に憧れていたと云
う。

金閣寺に代表される絢爛たる北山文化の義満である。

『寶』解明の初期段階、愚生が『寶』制作の本命と
疑ったのが徽宗帝で数カ月間、翻弄された
承禎同様、義満も認める徽宗の慧眼は天才的で、しか
も道教に心酔していたからである。



また、銀閣寺に代表される東山文化の義政もまた、可能性を秘める。

いずれにしても、室町幕府のコレクションの中に「寶」が有ったなら、信長なら一発で、価値を喝破したであろう。

そして信長なら超極秘、「寶」を誰の目にも触れさせず秘蔵したであろう。

もし、極秘に意見を求めるなら、茶聖・千利休ただ一人であろう。

いずれにしても、秀吉も利家も、その鬼才信長の薫陶・感化を受けている。

信長が火を付けた焼き物ブームは、秀吉の欲望に火をつけた。

朝鮮出兵は後世、茶碗戦争と異名される程である。

足利義満



織田信長

秀吉の命で朝鮮の陶工部落民、丸ごと日本に引き連れて来ている。

秀吉が花開かせた桃山文化は、一大焼き物ブームでもあった。

利休に設計させた黄金の茶室は、桃山文化の象徴である。

その秀吉の最晩年、利家は、最愛の世継ぎ、秀頼の最大の後見人・五大老であった。



関白 秀吉

大らかで信長より執着心の少ない幸運児・秀吉は有名な「富士茄子の茶入れ」を利家に贈っている、であるから秀吉が「寶」を手にしていたら、晩年の五大老・利家に贈った事に何の疑いも無い。



前田 利家

現在、富山呉羽山丘陵にある富山藩の菩提寺である真国寺の御本尊・釈迦如来像は中国製の脱乾漆像で、国宝級と名高い。

愚生は「寶」の流れと、この釈迦如来像の来し方と、オーバーラップするのである。今日に花開く、加賀文化の隆盛を築いたのは、美術工芸品の好事家、藩主前田家代々である。

以上歴史の大河は馬崑から揚子江・東シナ海の対馬海流・そして天草・長門と確実に繋がった筈である。

これにて、「その三」の末尾に記した

「寶」渡来の歴史の●①●②●③の重

要キーワードはクリアし、1300年前の中国馬崑から前田藩・富山藩そして我が町氷見市まで歴史の糸が一本に繋がった筈である。



<其の十九>

歴史の確かな事は、日本の陶磁器研究の第一人者が、焼成不可能と断言した唐白磁の「寶」が、この日本にある現実である。

神器・太極「寶」の解明と検証は、本件問題以外すべて完璧に終えている。

そして印面には、未来の超スーパーコンピューターでも創造と解析不可能な唐代・玄宗皇帝が献呈した「太上老君」の尊号が刻まれた「寶」の現実である。

「寶」は治乱興亡の中国を嫌い、万里の波濤を越えて、現代日本に降臨したのである。

そして「寶」は、日本一の獅子舞のメッカ、万葉の氷見に辿り着いたのである。

これは小説の世界では無い現実なのである。

自然界は水に見られるように全て上から下へ流れる。
反対に財力・富は、その逆で、上に吸い上げられる。
しかし、財力がいくらある人でも「寶」自身が人を選別する。
美術品を観る目線の高さと見識、そして無心でなくては素通りである。
楊貴妃渡来から信長の戦国期まで約800年の歴史の沈黙がある。
神器「寶」の神聖さと、それを受け継いだ者達の心眼、普遍の美の哲理が「寶」を守ったのである。
天草と長門以外に熱田神宮・秩父の法雲寺・京都の泉涌寺にも楊貴妃伝説がある。
正倉院の香木を所望した信長である。

「寶」取得は信長である。間違いは無い。

<其の二十>

天才・魔王・織田信長について、更に踏み込もう。
信長は「寶」のキーマンである。
千里眼承禎の眼に狂いはない。
ご存知のように、信長は、浅井義景と浅井長政に与する比叡山延暦寺を攻めて廃墟とした。
延暦寺は数千の僧兵を抱え戦国大名並みの一大勢力であった。



延暦寺は数百年もの間、王城鎮護の霊場として貴賤を問わず絶大な信仰を集めていた。

信長は、その叡山を包囲し延暦寺に立て籠もる、高僧・悪僧・子供・老若男女一人残らず打ち首にし、目を覆う惨劇で、四日間、叡山から黒煙が立ちのぼったという。

有史以来の惨劇は、野火の如く全国の寺社に伝わり、大寺院の僧侶は恐怖に

おのの
慄いた。

まさに、全国の寺社の伽藍が揺れ、本尊が傾き、鬼瓦が落下するほどの激震



であったろう。

魔王、信長の由縁である。

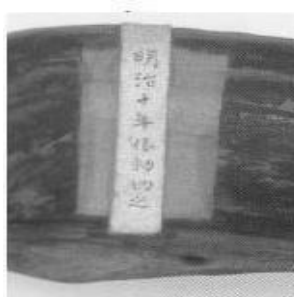
その信長が3000の兵を引き連れ参内を名目に奈良に来て、東大寺正倉院の蘭奢待を所望したのである。

蘭奢待を所望したのは公式には、足利義政と信長そして明治天皇のみである。



延暦寺

正倉院 蘭奢待



明治天皇
切り取り跡



(左)織田信長 (右)足利義政
切り取り跡

信長が東大寺に軍勢を伴って訪れた時、「寶」安置と推測する奈良の七大寺、唐招提寺他、超コレクター信長に、我先に宝物を献上した事は、間違いない。奈良だけではない全国の大僧正達の恐怖の鼓動が聞こえてくる。

江戸初期に書かれた「信長公記」によれば、京都・堺で信長は強制的に、茶器や絵画を収集したとある。

俗に云う信長の“名物狩り”である。

信長の蘭奢待の所望は即ち、七大寺・唐招提寺のみならず、全国の寺社に秘蔵された名物の所望である事は、火を見るよりも明らかである。

超一流の、焼き物を見る目なくして、“天下布武”は成し得ない。

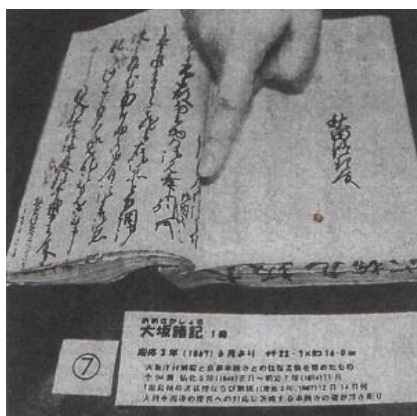
「寶」は、約800年の眠りから、天下人信長の手に渡ったのである。

そして本能寺で炎に消えた名物以外、殆どは幸運児、秀吉の手中となった。

昨年11月25日付の富山新聞に、1867年（慶応3）大政奉還後に大阪城に移った徳川慶喜に西本願寺が寺の生き残りを懸けて、内密に進物せよとの、

古文書が見つかったと、本願寺・史料研究所が発表した。

天下人信長に対する、戦国期の寺社も同様である。



西本願寺古文書

以上関係者の今後の研究とご批判が待たれる。

人類の至宝「寶」は、行き着くところに向かう。

唐の洛陽から、海を渡り、大宰府から大和朝廷へ、そして献物された七大寺で約800の眠りにについていた。

魔王信長が、その眠りから、呼び覚ましたのである。

千里眼・承禎の眼に狂いはない。

<其の二十>

更にコレクター信長を追う。

茶の湯を武家社会に普及させた信長は唐物の最大の先駆者である。

信長の茶器の収集品の一部を観よう。

松永久秀から	九十九髪茄子の茶入れ
今井宗久から	松島茶壺
大文字屋から	初花肩衝
祐乗坊から	富士茄子の茶入れ
池上如慶から	かぶらなしの花入れ
薬師院から	小松島の茶壺
油屋常祐から	柑子の花入れ
石山本願寺から	白天目茶碗
三好康長から	松花茶壺
朝倉家から	本能寺文林茶入れ

上記の如く、信長は幅広く、しかも半ば強制的に収集している。

上記に薬師院・石山本願寺もある。

寺社は、時の権力者の庇護がなくては、立ち行かない。

信長の知性・嗅覚・視野・戦略、まさに脳内宇宙は凄い。

「寶」の旅路とオーバーラップして、新田義貞が所有していた肩衝（唐物）の数奇な変遷を紹介しよう。

新田義貞～村田珠光（足利義正の茶の師）～三好政長～織田信長～明智光秀（安土城・在）～大友宗麟～関白秀吉～秀頼～徳川家康～徳川頼房～水戸家～現在水戸市の彰考館・徳川博物館に収蔵されている。

義満・義政の室町幕府からか、それとも奈良七大寺からか、いずれにしても天下一の超コレクター信長しかありえない。

神器「寶」は茶器ではなかった事と、太極の韻文の不可解さゆえに、歴史の表舞台には登場しなかった。

そして関白秀吉を経て、愛息秀頼の最大の後見人、五大老前田利家に渡った。



「寶」の歴史の糸は、これにて繋がった。

肩衝つくも

今後、孝謙天皇、光明皇后の七大寺その他の献物帳、信長、秀吉の収集品、そして加賀藩の宝物資料等々は、現代研究者に託した。

神器・「寶」は、人類の至宝である。その歴史的、責務は計り知れない。

日本で指折る阿呆が天に祈り、足掛け33年一日平均9時間、確実に10万時間を費やし、ここまで来た。

先人のお陰と、先祖そして天の加護としか言いようがない。

後事は、今後の関係者に委ねるしか術は無い。

歴史のお膳立てはした筈である。

歴史は「太」と「極」・「極」と「太」まさに「太極」を観なくては、真の歴史は観えない。

<パート①あとがき>

「寶」の戦いは、日本の威信を賭けた戦いである。

神器・太極「寶」は、国際道義を真摯に貫く、世界の文化が花咲く大和の日本。列島は大陸との絶妙な距離にあり、山河は、四季の変化に彩られ、五穀豊穰今年も全国津々浦々で獅子が舞う。

「寶」は、世界平和に貢献する我が日本国に必然的に降臨したのである。

これにて駅舎馬菟から加賀藩そして獅子舞のメッカ・万葉の氷見まで、歴史の大河は流れ来た筈である。

愚生は学者ではないが、小誌に枝葉な錯誤はあっても、歴史の大脈・大本に深い自負がある。

歴史を彩った、天下人達の胸の鼓動が聞こえねば、真の歴史は観えない。

「寶」の韻文・九文字と同様、愚生の『和漢・太極「寶」歌』も天文学的確率の奇跡の歌である。

焼成不可能な獅子印.「寶」と、『和漢太極「寶」歌』この二つが厳然たる史実の裏打ちである。

楊貴妃が、望郷の念で立ったと思われる天草の楊貴妃の像から望む対岸の島々を眺めて、1300年の歴史の大河を観た。

小誌に向かったのは「龍神楊貴妃伝」の著者・村川実先生に触発されたからである。

天草の平田豊先生・長門・二尊院の田立智暁住職またアシスタントの山下朝子嬢・高木亮氏にも、深く感謝申し上げる次第です。

昨今インターネットの時代である。

この小誌を書きあげるのに、約5ヶ月で、何とか仕上げる事が出来た。

昔なら数年を要したであろう。

この小誌の仕上げに「寶」本刊行後、25年を待たねばならなかった。

先学各位に深く感謝する次第である。

最後に掲載の写真・イラスト・資料その他、人類の至宝「寶」に免じ、お許しを願う次第である。

以上、愚生の推論に矛盾はあるか、日本中の関係者に歴史の是非を問う次第である。

平成 29 年 1 月 5 日